日吉台地下壕保存の会
会報

第41号
発行　日吉台地下壕保存の会
編集　事務局
223 横浜市港北区下田町3-15-27
寺田方　TEL.045-562-1282
（年会費）一口千円で、一口以上
郵便振込口座番号00250-2-74921
（加入者名）日吉台地下壕保存の会

松代大本営を史跡に

朝日新聞1995・10・6より

十菱　駿武
山梨学院大教授
（考古学）

戦後五十年の今年、被爆国日本のシンボルである広島の原爆ドームが史跡に指定され、世界遺産に登録されることになった。

これまで史跡の対象は明治初期までとされたが、近代の文化遺産を幅広く保護すべきだという論議が盛んになり、史跡の基準が広がった。今年三月改正の文化庁の史跡指定基準は、「第二次世界大戦集結ころまで」の「戦跡・古戦場、戦災跡など」が加わり、近代の戦争遺跡は文化財保護法の対象となり、晴れて市民権を得ることができるようになったのだ。

これまでも、名古屋市の見晴台遺跡の高射砲台や、東京都北区赤羽の上ノ台遺跡の軍事施設など、原始・古代の遺跡とともに、戦争遺跡の発掘調査が行われてきた。

一九四五年の日米決戦で二十万人という尊い命を失った沖縄県では、ひめゆりの塔で有名な南風原（はえばる）陸軍病院壕（ごう）の実測調査・記録を積極的に行い、戦跡公園として史跡に指定した。大分県宇佐市の宇佐掩体壕（えんたいごう・飛行機の地下格納庫）も文化財保護運動によって今年三月、市指定史跡になった。東京都東大和市の戦災工場跡も十月に市指定史跡になった。

各地の戦争遺跡の掘りおこしや平和祈念館建設運動の高まりから、考古学研究会は「戦争と考古学」を大会テーマとし、文化財保存全国協議会は今年六月、「戦争遺跡を保存する決議」を文化庁、長野県教育委員会などに提出した。

さて、長野市の松代大本営は、原爆ドームや沖縄の戦跡とならんで著名な戦争遺跡だ。松代の象山・舞鶴山の地中に延長十三キロの地下壕があり、壕内にはトロッコ溝や落書き文字、記号が多数残っている。天皇御座所や賢所（かしこどころ）も造られ、工事に動員された朝鮮人労働者などの作業員宿舎跡や兵隊の駐屯舎などが壕外に点在している。

四四年十一月から終戦までに築造された仮皇居、政府機関、軍部の移転予定地として、日本近現代史のうえで価値は高い。

ところが、長野県、長野市教委は、松代大本営は史跡基準に適合せず、築造途中の予定地だから史跡にならない、とされているそうだ。

中世の戦争遺跡である山城・砦（とりで）跡の場合、城としての規模、構造がしっかりしており、歴史的背景が確実であれば史跡に指定されている。武田勝頼の居城として急造された山梨県韮崎市の新府城は戦場にはならなかったが、優れた遺構をもとに国の史跡になっている。松代大本営の大規模な遺構は中世城郭をしのぐもので、日本政治史・社会史の上でも意義深いと考える。

まして、松代大本営は「保存を進める会」や高校生の保存運動によって、地下壕が公開され、年間十万人が訪れる学習の場となっている。

私は、松代大本営を史跡に指定する機は熟したと思う。史跡として文化財登録することによって、悲惨な戦争の実態を知り、平和学習・文化観光の場の名をさらに高めることができよう。行政や県民のさらなる理解を、ぜひとも願いたいものである。

目　次　　ページ

松代大本営を史跡に　1
イマジネーション・想像力　2
「第5回横浜川崎平和のための戦争展97」開催にあたって　3
城・要塞・地下壕　4－5
連載日吉台地下壕
当時の関係者の思い出話18　6－7
幹事会報告・運営委員会報告　7－8
お知らせ　8

イマジネーション・想像力

副会長　東郷秀光

物事を理解するにはイマジネーションが必要である。この考え方が不正確だというなら、物事を理解しようとするには積極的な関心と豊かな想像力が不可欠だと言い直しても良い。

私はずっと以前に日本英文学会の大会が広島で開催された際に広島の原爆資料館を訪れたことがある。その時は短い時間ではあったが印象は鮮烈であった。

原爆による被災者の悲惨な姿は写真や報告書を通じて頭では分かっていた。しかし資料館に展示されていたカーキ色の戦闘帽がなぜか心に迫るものがあった。その戦闘帽は勤労動員を受けた旧制中学生が被っていたものらしい。この中学生は広島の工場に動員され、八月六日の朝に母親が作ってくれた弁当を携えて地方から広島の工場にやって来る途中で原爆投下に遭ったものであろう。この説明が資料館のものなのか、私の想像が生み出したものかなのかは今では確信がない。

私の知人の国文学者は旧制中学生の時、学徒動員を受けて広島に行くことになっていたが、その日は病気で欠席したために死を免れた。彼は亡くなった同級生の命日には母親をよく訪ねたが、母親の悲しく恨めしそうな表情のために会うのが辛かったという。私の知人は大学の教師になってからは戦争を扱った文学作品を学生と共にずっと読んできていると語ったことがある。

知人のこの話が広島の資料館で見たカーキ色の戦闘帽と結びついて私の印象が鮮明になり、記憶が変形したのかも知れない。たしかに被害の統計的な数字や被害者の遺品などは冷厳な事実を示すものではある。しかしそれは客観的なものである。悪くすると事実がただそこにある、自分はその状況に置かれなくて幸であった、という無関心を生む結果にもなり兼ねない。

しかし客観的な事実が個人にとって特別の意味を帯びて迫ってくる場合がある。それは個人に何らかの関わりが生じる場合であり、想像力が旺盛に働く場合である。かの『ハムレット』では城に立ち寄った旅役者達が芝居の人物の役になり切って情熱を注ぐ姿を見て、ハムレットは父王の復讐に立ち上がる情熱に乏しい自分を振り返る姿は印象的である。

日吉台地下壕に先ず入ってみよう。そして当時の戦況に思いを馳せ、戦争を立体的に考えてみてはどうであろうか。

（慶應義塾大学名誉教授　英語・英文学）

97川崎・横浜平和のための戦争展 第5回開催にあたって

実行委員長　亀岡　敦子

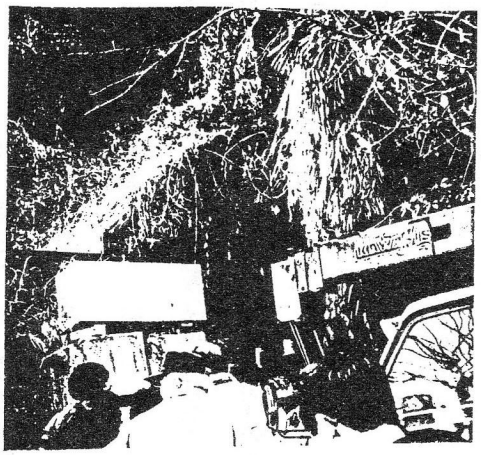
五年前から横浜と川崎で交互に開催してきたこの「平和のための戦争展」も、五回目の開催をお知らせすることになりました。地元に残る戦争の跡を残し、次世代への平和のメッセージとしたい。その運動の一環として続けてきました。写真パネルや資料の展示と、講演、シンポジウム、朗読、という形をとってきました。写真も事実をそのまま写すだけではなく強く感性に訴える内面を持っていると考えています。又、その時々の講演や朗読をして下さった方々は、皆一流の方ばかりでした。気負わず、無理をせず、をモットーに、だからこそ忙しい社会人の寄合い所帯実行委員会が続いてきたのだし、内容に手抜きはしなかった、と誇りを持っているのです。

しかし、毎年何の心配もなく企画できるのも、全て支えて下さる多くの方のおかげです。今年は六月一四日（土）、一五日（日）の両日、川崎市平和館（中原区木月・東横線元住吉下車）で開催します。昨年から、神奈川県や、横浜市、川崎市にも私達の保存運動にたいして、少し動きがあったように思われます。文化庁への働きかけも模索しております。従って今回は昨年のテーマを更に深めるため前回の講師、菊池実氏（埋蔵文化財研究家）、十菱駿武氏（山梨学院大学教授）をお招きし、寺田貞治、渡辺賢二、新井揆博の五人のシンポジウムを計画しました。

昨年「憲法を方言で読む」というユニークな取り組みが新鮮でした大原穣子氏を中心に芸術座の俳優による朗読劇も予定しています。一四日の若者の発表も大学生や高校生が、自分の体験や考えを発表します。

また、プレイベントとして、五月一八日（日）と六月八日（日）の二回、蟹ケ谷地下壕と日吉台地下壕の見学会を行います。皆様のご参加お待ちしております。

会員の皆様の物心両面の援助に支えられて今年の「戦争展」を実りの大きいものにしたいと思います。どうぞご協力、宜しくお願いいたします。また、もし実行委員になってもいい、実行委員が無理でも当日の受付けぐらいなら出来そう、と思われる方は、どうぞ、お力を貸して下さい。事務局にご連絡下さいますよう、お願いします。そして、どうぞ、六月には平和館までお運び下さい。



日吉台地下壕入口
見学会の日に

城・要塞・地下壕

会員　酒井　啓

小・中学生の頃から甲冑や城郭・近代要塞などの防御用の武具・施設に興味があった。それらに施された守るための工夫の妙をみると、酔うほどに感嘆してしまうのである。

たとえば、今は草木に埋もれている中世城郭でも、丹念に調べれば、しばしば、その合理的で美しいほどの陣地構築の出来ばえをみることが出来る。

僕が城郭を探訪するときには、必ず城の縄張り図（構造図）の掲載された研究文献を携えていく。これらの研究文献は、主に、1970年代以降、全国の城郭研究者達によって著されたものである。注目すべきは、1980年代～1990年代に、主に考古学出身のプロ研究者による研究文献が増加していることである。

プロ城郭研究者の多くは、大学・博物館などの公的研究機関に所属しながらも、幾つかのアマチュア研究者同席の研究組織（城郭談話会・中世城郭研究会・日本城郭史学会など）を拠点に活動してきた。

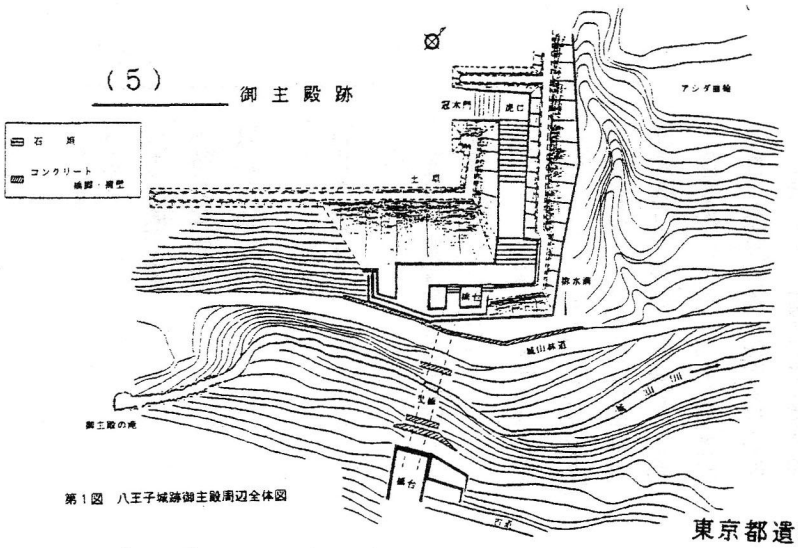
彼らの極めて重要な成果の一つは、画期的な〝縄張り編年（縄張り発達史）〟や〝城下町発達史〟を組む作業、文献史学など城郭関係分野との協力を通して、城郭研究の急速な〝学問化〟に成功したことである。

たとえば、中世的な地方政権（土豪・戦国大名など）が織豊政権に組み込まれると城・城下町が一変して織豊系になり、〝近世化〟することなどを明らかにし、〝日本史〟と〝地方史〟との合成に成功しているのである。

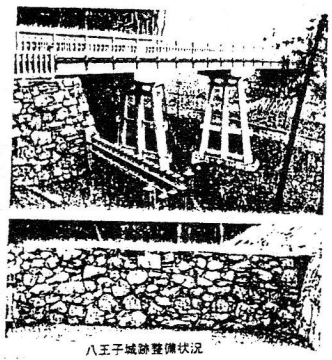
城郭研究の〝学問化〟は、城郭保護・保存をめぐる状況を良くするのに役立っている。なぜなら、〝学問成果〟は権威主義的になりがちな地方自治体の教育委員会・文化財行政に〝文化財としての城郭〟を再認識させるからである。

現に、全国各地の地方自治体において、城郭研究者・組織との協力により、城郭の本格的な発掘調査が進められており、新たに城郭博物館・資料館が設立されている。

そして、これらの活動は、城郭の〝過剰復元〟などの城郭認識への弊害はあるものの、〝町おこし〟〝村おこし〟に



検出された石垣


八王子城跡整備状況

東京都遺跡調査・研究発表会16より

役立っているようだ。

さて、ここ20数年の城郭認識の変遷を大観して気がつくことは、プロ研究者による研究水準向上と、アマチュア研究者による裾野拡大の重要性である。時期的にはアマチュアが先行し、研究文献の出版を通して社会の関心を呼び起こす。彼らが〝個人主義的〟に組織する研究会の中から、何人ものプロが出現して〝学問化〟を行い、結果的に城郭保護・保全に奉仕する。

このように、両者の協力・分業があって城郭研究界の健全な発展があり、より良い城郭認識が形成されるのであろう。

また、考古学と文献史学・建築史・土木史・歴史地理学などの城郭関係分野による協力関係が、大きな学問的成果を生み出すのに寄与してきたことも見逃せない。

一方、城郭認識の変遷に似たようなことは、他の分野でも生じていることが分かる。

たとえば、1977年の産業考古学会設立を焦点とする、技術史・産業史・経済史上で意味のある産業遺跡（鉱山・用水・橋梁・工場など）の認識変遷である。

こうしてみると、最近の戦争遺跡の認識状況は、1980年頃の城郭認識や1970年代後半の産業遺跡認識と似ているのではないだろうか。なぜなら、既に日本各地で教員を中心とするアマチュア戦争遺跡研究者が出現しているうえに、近く松代を拠点に全国的な〝戦争遺跡保存ネットワーク〟が結成されるらしいし、プロの考古学者の一部も学問的未開拓分野である戦争遺跡に注目しはじめているからである。

そのうち、地下壕発達史なども組めるようになるだろうし、戦争遺跡を材料として〝日本史〟と〝地方史〟の合成がなされるのではないかと期待している。

連載
日吉台地下壕
当時の関係者の
思い出話　18

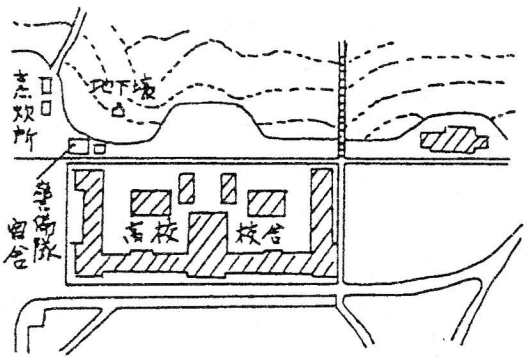
日吉の日々　10

元東京警備隊第七分隊の久保寺氏に伺います。

久保寺　重夫氏の話
（ききて：寺田貞治）

昭和一九年八月、武山海兵団に入り、翌年一月頃久里浜工作学校に入った。人間魚雷を作ったり、海に潜る仕事をする所で、一週間に二雙の割で人間魚雷が作られ、翌日にはもう持って行かれていた。大きさは、長さ八m、直径一m位で、寝るようにしてやっと入れる空間に特攻隊員が入り、生きて帰ることのない出撃をしていった。

昭和二〇年三月、私は日吉の東京警備隊第七分隊に来た。この隊は軍令部と共に日吉にきたものと思われる。約八〇人来ていた。兵が五〇人、下士官が四人、士官以上が二〇～三〇人位であった。士官は下宿している人が多く、殆ど外泊していた。佐官以上は自宅から通っており、夜は家に帰った。下士官と兵が兵舎に寝泊りしていた。現高校校舎の中庭の防火用水の東側に二階屋があり、兵舎になっていた。



私は岡崎善吉隊長（中佐）や坪井泰一分隊長の従兵をしていた。警備隊の仕事は事故さえなければ何もすることがなかった。隊長や分隊長と一緒に、いつも高級車に乗って東京や横須賀に出歩いていた。

現慶大記念館の辺りに警備隊の烹炊所があった。食事は白い御飯で不自由することはなかった。時々、航空隊の非常食のチョコレートや菓子などを食べた。タバコもいいものを吸っていた。朝食は白米の御飯、味噌汁、漬物、めざし（二本位）だった。昼食は御飯に魚や肉が出た。夕食は昼食と同じようなもので、昼食の残りが出たこともある。カレーが三日続いたこともある。

警備隊の地下壕は高校校舎の東斜面に横穴が掘られていた。入口は狭かったが、中は八畳位の広さがあった。連合艦隊司令部の地下壕に入ったことがあったが、金鵄勲章が箱にいっぱい詰まっているのが見えた。

（生協ニュース教職員版第五〇号より抜粋転載）

もう一方、元海軍軍令部第三部理事生の斎藤さんに伺います。

斎藤　君子氏の話
（ききて：寺田貞治）

女学校を卒業し、お稽古事をしていたが、先生が疎開されてできなくなり、時節柄家でぶらぶらしていることもできないので、最初区役所で臨時に奉仕をしていた。しかし、もっと安全で給料も頂ける所にいった方がよいので、地下壕のある日吉の軍令部に、航空本部にいた従兄弟に紹介して貰っていくことになった。

昭和一九年九月に来て、現高校校舎の二階にいた。校門に守衛がいた。勤めは九時から一七時迄で、軍極秘の書類の写しが多かった。中国関係の情報を担当する所で、地図を書いたこともある。個人には全体が分らないように、秘密保持のシステムはうまくできていた。中国関係は一部屋で小さかったので家族的であった。米国関係の実松氏（中佐）は厳しかったと聞いている。理事生は各課に分れていたので、全体で何人いたのか分らない。

食事は昼食は比較的大きいコッペパン一個と野菜入りシチューが出た。菓子も時々出た。食券を頂いて食べた。中庭の食堂に校舎から簾子を通って行った。士官達も食べていたが、自分達とは食べるものが違うと思った。お弁当持参でいきスープを飲んで、パンは食べずに家に持ち帰った。ちゃんとしたコッペパンで美味しかった。スープは終戦近くになるとウドン粉を薄めて塩を入れただけのものになり不味かった。雑炊も出たことがある。冬に炭一俵を貰ったことがあった。

軍令部第三部は少尉以上の士官ばかりで、宿直は少尉迄がやっていた。大尉以下は予備学生で、大学を出たばかりなので学生みたいだった。近所に下宿していて、お腹が空くと言っていた。勤めが終るとよく遊びに来た。沢田さん（後に国連大使になった人）もいた。時々高松宮が来て作戦会議をしていたが、高校校舎のどこでやっていたかは分らない。

（生協ニュース教職員版第五三号より抜粋転載）

運営委員会報告

第三回

一九九七年一月二〇日一九時

日吉普通部通り「秀」

報告

一、一一月三〇日逗子高校コミスクOB会による見学会二八名参加

二、一二月四日会報四〇号発行、発送

三、同五日地元の地下壕関係者と寺田事務局長が話し合いをもった。その後、市の文化財課、及び慶応義塾に連絡を取った

四、同一三日地元の関係者と寺田事務局長が市と県の文化財課に行き、考え方を聞いた。文化庁から近現代の遺跡の調査依頼がきており、五～六年かけて調査するとのことであった

五、同二〇日慶応高校生による見学会約六〇名、教員二名参加

六、一九九七年一月二一日第三回運営委員会開催、新年会を兼ねる

議事

一九九七年度の行事について

① 97平和のための戦争展ながわ　八月二八～三一日鎌倉芸術館ギャラリー

② 97平和のための戦争展in よこはま　五月一〇～一一日神奈川県民センター

幹事会報告

第六回

二月一七日一九時～

コーヒー領事館

報告

一、二月一二日港北警察署による見学会

二、同一七日第六回幹事会開催

議事

一九九七年総会について

＊四月二六日（土）一四時～慶大藤山記念館大会議室

運営委員会報告

第四回
三月一七日一八時半〜
フードギャラリー
一、二月二四日97平和のための戦争展inよこはま第二回実行委員会出席
二、同二四日横浜市平和資料館（仮称）建設計画要請（赤レンガ倉庫利用）第一回打合せに出席
三、三月二日城法谷（蟹ケ谷通信隊地下壕所在地）の開発に伴う環境アセスメントの公聴会に出席
四、同一〇日横浜市平和資料館（仮称）第二回打合せに出席
五、同一三日川崎・横浜平和のための戦争展第五回，97第一回実行委員会に出席

お　知　ら　せ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

１９９７年度総会　１９９７年４月２６日　午後２時〜
慶大藤山記念館大会議室（東横線日吉駅下車）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

会費納入について：１９９６年度までの会費と、１９９７度の会費の振込用紙を同封します。宜しくお願いします。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

97川崎・横浜平和のための戦争展　６月１４日（土）〜１５日（日）
川崎市平和館（東横線元住吉下車）

６月１４日（土）１０時〜１７時　展示
１４時〜１６時　若者による発表
６月１５日（日）１０時〜１７時　展示
１３時〜１６時３０分
朗読劇　大原穣子ほか
シンポジウム・文化財としての戦争遺跡
十菱駿武・菊池実・寺田貞治・渡辺賢二・新井揆博
５月１８日（日）プレイベント見学会
６月８日　（日）　同上
２回とも集合時間・場所は同じ
１０時　蟹ケ谷通信隊地下壕
蟹ケ谷バス停集合（東横線綱島駅〜南武線武蔵新城駅）
１３時　日吉台地下壕　東横線日吉駅集合

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

97平和のための戦争展inよこはま　５月１０日（土）〜１１日（日）
神奈川県民センター（横浜駅下車）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

97平和のための戦争展かながわ　８月２８日（木）〜３１日（日）
鎌倉芸術館ギャラリー（大船駅下車）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第９回総会のお知らせ

日時：４月２６日（土）午後２時～４時、
場所：慶応義塾藤山記念館大会議室（東横線日吉駅・東側すぐ慶應日吉キャンパス）

講演（午後２時～３時）

講　　師：元海軍省人事局・主計兵曹長　若林繁雄氏

講師紹介：昭和１１年、１９歳の時に志願して海軍計理学校に入られ、後に海軍省に配属されました。昭和２０年５月２５日の東京大空襲で海軍省が焼ける前に、日吉に海軍省人事局とともに日吉に移られ、日吉の地下壕の中で人事局の仕事をされ、昭和２０年１２月１日に退役されました。その後、海軍省が復員省にかわり、そこで残務整理をされていた。

総会（午後３時～４時）

議事

1996年度活動報告・会計報告・会計監査報告
1996年度活動報告・会計報告・会計監査報告についての質疑応答と承認
1997年度運営委員候補の選出と承認、新会長の挨拶
1997年度活動方針案・予算案の説明
1997年度の活動方針案・予算案についての質疑応答
1997年度の活動方針案・予算案の承認